

寄人が描かれている。その数寄人を記した章段がまとめて配列された場所は、長明の和歌観から新風の理解へと進む過程に置かれたものであり、それから考えても数寄人の記事が長明歌論の展開に大きく関係しているものと考えたのである。

本章の第一節で清輔が『袋草紙』で描いた数寄者について考察した。清輔は偏執とも思える数寄者を「をこ」と辛口に評している。次に第二節で長明が『発心集』『無名抄』で描いた数寄の精神を考察した。数寄であることは仏道修行にも通じ往生につながる。また、数寄というのは、秀歌を詠む詠歌態度としても、長明が庶幾した姿であった。

以上をまとめると、長明歌論の根底にあったのは、態度論であり、長明はそこで秀歌を詠む重要な要素として、歌に執することを中心に強調しているのである。そういった態度を基にして、表現・内容の両面に「ことわり」をこめ、つくりたてることなく自然に、艶で景気の浮かぶ歌を詠むことを志向したのが長明であった。それは俊恵・俊成という二人の師の歌論を享受し、自身の中で熟成させた長明の歌論でもあり、新風をも積極的に取り入れて自分のものにしたようにした長明の詠歌に対する姿勢の証でもある。

近代以降における琉球民族と日本語との関わり

曹 貞 姫

目 次

はじめに

第一部 沖縄における日本語教育史と問題点

第一章 沖縄での「標準語」教育の出発地点

第一節 琉球民族と琉球語

第二節 「会話伝習所」と『沖縄対話』

第三節 教育現場での学習状況

第四節 学習者達の体験談（「方言札」二）

第二章 「方言論争」の意義

第一節 一九四〇年代前後の「標準語」教育

第二節 柳宗悦と「日本民芸協会」の異議申し立て

第三節 当事者らの反論

第四節 学習者達の体験談（「方言札」一）

第三章 戦後の「標準語」教育再燃の背景

第一節 アメリカの「琉球人」への言語政策

第二節 「標準語」教育と「祖国復帰運動」

第三節 学習者達の体験談（「方言札」三）

第四節 ウチナーグチ教育の現状

第二部 在阪沖縄人の日本語体験
おわりに

二十一世紀に入り、二十世紀の国民国家像は崩れつつある。一つの国家の領土内には、「国語」「公用語」以外にも、諸人種・民族・宗教等によって人為的に分けられ他言語を話す複数の人達が存在している。しかし、私たち人類は、文字を所有する有無に関わらず、だれもが生まれた当初は、「母語」に育まれる。そして、次に習得する第二(以上)言語や国籍についても、一個人の判断と選択に任せられるべきだろう。

日本国内にも、近年、そういう多種多様の人種民族の人達で、巧みに日本語を駆使している人々が増加しているが、昔から多言語社会だったのである。

古代より、日本列島の各地方の人はその地元の言葉を、アイヌ民族はアイヌ語を、琉球民族は琉球語を話していただろうが、ここ一〇〇年の近代に入っては、「在留」朝鮮人台湾人中国人たちも「在日」へと変容を遂げる過程で、日本語を学習してきた。

本来、言語自体は拘束力を持たないし、誰をも傷つけないし暴力性はない筈である。ただ、これが「国語」コンフォリズムとして、なんらかの規範性を持たされ、権力を付与されていると思った人達に使用されると、こういう事になったかは、つい半世紀前での植民地朝鮮台湾での「国語」教育に象徴されている。

しかし、そのような外国での実態を考える前に、日本領土の最南端に位置している沖縄での「国語」教育とはどのようなものだったのかについて考察してみたい。

従来、近代日本の公機関での日本語教育は台湾からだとされているが、沖縄では、日本の明治政府によって、五年早く一八八〇(明治一三)年に「会話伝習所」が設けられている。『沖縄対話』を教科書にして始まった当初の日本語学習は、学習者達も、一四九二年に沖縄島を統一した琉球王朝によって、「ことばの七島灘」があったとはいえ、文字は共有できていたが、話しことばが日本本土とは十数世紀も異なる歴史政治経済文化圏にあったため、外国語を学ぶようなものであった。

そして、日本の国策に応じるようにして、「東京語」「普通語」「標準語」「共通語」と呼称を変えてきた沖縄人の日本語学習は、学校現場内において、「方言札」と言う罰則を生み出してしまった。

「方言札」は、共同体の生存に関わる山の薪をとったりした場合とかに適用された「シマ」の内規法を、ある一沖縄人教師が適用したものだとの証言がある。「方言」(沖縄語)を話した生徒に、「方言札」と書いてある木札を渡し、次の人に渡していくのだが、どこかの社会でも制裁法はあるだろうが、それがどうして、「国語」としての日本語学習に持ちこまれたのか。運命共同体としての島人には、「方言札」を適用しなければ、学習効果があげられなかった教師側に反省を求めなければならない歴史的事実ではないだろうか。

沖縄人にとつての日本語学習は、ただ単なる語学学習ではなく、「沖縄戦」を体験した戦後においても、「祖国復帰運動」を指導した教師たちによって、「方言札」が「日の丸」「君が代」と共に再現さ

れたように、日本人化の目安となった。沖縄は、「国語」を軸にして国民形成がなされた二十世紀の近代国家への再編成の一典型を示す象徴的な場所の一点でもあった。

「方言札」が実施された当初、県立一中の学生たちは「大和口札」と呼んでいたが、本論文は、言語は国の大小や権力性に無関係で、文化と同じく優劣で断じられてはならないことを、大小の「方言札」を再現させないために、なぜそのようなことが起きてしまったのかを追及する一試論である。

「原日本語」の一勢力が「原琉球語」とされているが、「沖縄学の父」とされている伊波普猷に拠ると、これを「母の言葉」と呼び、それ以降は「父の言葉」と呼んでいる。前者が「本土方言」であり、後者が「琉球方言」と呼ばれているものである。

島々はそれぞれが自給自足経済だったので、ことばは通じず、「人種が異なる」とまで言われていた程であったが、島同士間での疎通がはかれるようになったのは、さきの「沖縄戦」後、沖縄を占領した米軍が、沖縄本島に軍用道路をつくり、それまでは三日かかった行程が半日になり、戦後のラジオテレビの普及で、日本本土との「共通語」化がすすんだ、ここ半世紀のことであるように、沖縄での近現代の日本語学習の歴史は新しいといえるだろう。

その特異な歴史的経過のためか、廃藩置県後の沖縄人の日本語学習体験については、日本本土ではあまり知られていないのが実情である。一九四〇（昭和一五）年、日本民芸協会の柳宗悦等の一行が、

近代以降における琉球民族と日本語との関わり

沖縄へ行って巻き起こした「方言論争」は知られている方だが、これは、「標準語励行県民運動要項」を作成した吉田嗣延が、『琉球新報』に対抗するために『沖縄朝日』の記者に促されて反論したものと後に証言しているように、沖縄庶民の母語に対する心情を報道しようとしたのではなく、日本の文化人から指摘されることへの反発でもあったと考えられる。なぜなら、「方言札」は、明治政府以来の学校教育内における日本語学習への一方的な強制から始まったのだから。それを励んできた沖縄教育界、支持してきた新聞人、教師、公務員たちには、本末転倒の「論争」だったろう。

柳側を支持した沖縄人の中には、職を失った人もいたように、軍国主義一色の時代に、少しでも違う事を言うだけでどういうことになったかを示す一典型と言えるだろうが、このような傾向は現代にもあるのだから、まして戦前の「国語」コンフォーム一色であった日本では、特筆していい「論争」だろう。

そして、柳らの異議申し立てに対して、表面化したウチナーグチ（沖縄語）は、軍国主義の怒濤に飲まれ、「沖縄戦」（島人の三分の一が死亡）時には、「軍人軍属ヲ問ワズ標準語以外ノ使用ヲ禁ズ 沖縄語ヲ以テ談話シタル者ハ間諜トミナス」と言う極限の事態までに達してしまった。

一九四五年六月二三日から一九七二年五月一五日まで、沖縄はアメリカ占領下にあった。アメリカ側は、沖縄人を「琉球人」、彼等の言語を「琉球語」、設立した大学も「琉球大学」（戦前の沖縄に日

本は大学を作っていなかった」と呼んだ。アメリカ側がどんな理由でこのような呼称に至ったのかは、今後の私の「新沖縄学」の課題に含まれているが、「会話伝習所」設立から一世紀経た一九八〇年頃から、沖縄人によるウチナーグチ（沖縄語）の復権運動とも呼べる動きが出てきており、これは世界の少数言語運動の動きにも関係があるし、従来学校教育内で、「方言札」（「復帰」後見られない点に特徴がある）が母語を禁止し、自由な表現を抑圧していたのは、戦前戦後とも、公教育が震源地であったので、沖縄教育界の反省の現れとみていいのではないだろうか。

以上が、第一部でふれた沖縄での日本語教育史の概要である。第二部では、大阪市大正区は、住民の三分の一が沖縄出身者であるが、その方々の「日本語体験」と「母語」との関連性を教えていただくアンケートを実施し、その結果について分析・考察した。

アンケートの第一回は二〇〇二年五月七日に始まり、十一月五日までの計一一回一五〇人（男性六一人、女性八九人）である。

質問事項は、以下の三項目に焦点を絞った。

- 一、母語であるウチナーグチをどれくらいの方が話されるのか。
 - 二、ウチナーグチを「方言」と思っているのか。
 - 三、記憶の中で「方言札」が残されているのか。
- 「一」については、男性では、全体の約六割、女性の約七割もいた（なお、沖縄から転居してきた方は、男性は七割、女性は八割近く）。「二」については、男性の二六％、女性の三三％が、「三」について

は、男性は一六％、女性は三二％であった。

なお、「沖縄のことば」を「沖縄語」（ウチナーグチ）と思っている人は、「男性三三％女性三七％」であった。しかし、中には、「方言」を「琉球方言」と言うでしよう」と言われた方もいたが、私の質問意図である「日本の一方言」の意とはずれて受けとられていたようで、本論文の欠点のひとつでもある。

私の今後の課題は、私の拙いアンケート調査に真剣に応答し、何をするにも、対象との心の接点は何よりも大切であることを教えてくれた方々への感謝を具体的な形にすることで、そのために「新沖縄学」へと誘ってくれた沖縄人について、また「日本・日本語」との関連性について、もっともっと学び続けたい。今年は沖縄へ行っ

て勉強を続け、さらに当事者の沖縄人から学び続けることである。